「スポーツレポーター」として、東京 2020 大会に関わって

人間総合科学研究群 スポーツ国際開発学共同専攻 1 年

業務の概要：

まず初めに、私が関わった今回の業務内容の概要について、説明します。

実際に業務に従事したのは、オリンピック期間中の 2021 年 7 月 20 日～8 月 8 日でした。就業先は、OBS（Olympic Broadcasting Services）の中にある OIS（Olympic Information Services）という部署でした。

OIS は、オリンピックにおける公式な情報を各メディアに提供するという役割を担っています。私は、競技会場に「スポーツレポーター」として配置され、大会関連情報（競技や記者会見の内容やアスリートへのインタビューなど）を取材しました。その取材内容を記事にし、インフォメーションシステムを通じて，タイムリーにメディアに提供しました。また、インタビューした音声を収録する作業や、インタビュー記事の作成補助もしました。

業務の主な流れをまとめると、下記のようになります。

① 情報収集（その競技について、アスリートのこれまでの成績、興味深いトピック等）
② 事前準備(ミックスゾーンの確認、通訳の確認、流れの確認、選手等の情報収集)
③ 試合観戦（情報収集、インタビュー内容の決定）
④ インタビュー（ミックスゾーン）
⑤ インタビュー記事の作成

取材をした競技は、主に下記です。

バトミントン、 水球、 7 人制ラグビー、スポーツクライミング、柔道、レスリング、アーチェリー、射撃、3×3 バスケットボール、BMX レーシング、 卓球、バレーボール

以下で、この業務に関わった感想を記載します。

感想：

「オリンピックに貢献したい」という目標があった中で、今回、スイスチームの事前キャンプの準備、そしてこの OIS の一員としてオリンピックに貢献できたことを、誇りに思います。

世界最大級のイベントがどのように運営されているのか、誰がどこで、どのようなことをしているのかなど、テレビ画面からでは知りえない事を感じることができたのは、非常に貴重な経験でした。

率直な感想として、オリンピックを運営、そして成功に導くためには、多大な人力、そしてそれらの人々の協働が必要不可欠であることを、強く感じました。会場のオペレーション

はもちろん、交通機関や宿泊関連等、さまざまなことを円滑に、かつ安全に行わなければならず、さらに世界中から人々が来ていることも考えると、非常にやりがいのある、そしてタフなイベントであると思いました。

今回、私が就業したポジションですが、OIS のスポーツレポーター(ヤングレポーター)という職でした。OIS は、「オリンピック・パラリンピック大会における公式情報サービスであり、大会関連情報（競技や記者会見での記事、アスリートのインタビュー等）を、インフォメーションシステムを通じて、正確に、タイムリーにメディアに提供している組織」です。

業務内容としては、大きく分けて 2 つあり、1 つ目は、アスリート（主に日本人）へのインタビューおよびインタビュー記事の作成でした。この業務では、試合後のアスリートにインタビューを行い、その内容を英語の記事にする作業でした。2 つ目は、メインレポーターの業務補助でした。一緒に働いているレポーターの、インタビューの手伝いや記事作成に伴う情報の収集等を行いました。また、私は運が良いことに、日本人アスリートのインタビュー内容を基にしたニュース記事を執筆することもできました。その記事が、その競技の国際競技連盟の記者に引用されていたことは、非常に嬉しかった思い出です。

このような仕事を行った私ですが、世界最大級のスポーツイベントでのレポーター業を通して、以下の 2 つの重要なことを学びました。 1 つ目は、「事前準備」を行うことの大切さです。世界中から膨大な数の報道陣、関係者等が集まるオリンピックでは、目まぐるしく状況が変化し、想定外のことがたくさん起こっていました。その中で、OIS には、「正確に」「タイムリーに」「簡潔に」大会関連情報を届ける義務があり、アスリートやその競技に関する情報収集、インタビュー作業を含めた流れや会場の確認、ミックスゾーンでの立ち位置やインタビューが行われる順番、通訳の手配・情報共有等を、あらゆる状況を想定しながら、事前の準備を正確に行う必要がありました。担当レポーターとのコミュニケーション、情報の共有を含む、入念な準備なしには、業務を円滑に遂行できなかったと思います。

2 つ目として、グローバルに活躍する人材は、常にポジティブで謙虚な態度を取る必要があるということです。大会は早朝から夜遅くまで続くことから、非常にきつい状況でしたが、一緒に働くメインレポーター、大会スタッフ、そしてアスリートの方々は、常に前向き思考であり、謙虚で、かつフレンドリーに仕事をこなしていました。謙虚でポジティブな人々が協働するからこそ、大会が円滑に運営できるのだと改めて感じました。

これらの学んだことや早朝から夜遅くまで繰り返した①事前準備②状況にあった計画③話を伝えること・聞き出すこと④簡潔に、正確にまとめること等の一連のプロセスは、ど

の仕事でも活かせると考えています。

現在私は、スポーツ国際開発学を専攻しており、社会課題解決のためのスポーツの力を学んでいます。将来は、大学スポーツやプロスポーツに携わり、スポーツの「価値」を活用したいと考えており、非常に濃密であったこの経験を最大限に活かし、持続可能な社会に貢献、そしてもう一度オリンピックに今度は、運営する側として携わりたいと考えています。

最後に、この素晴らしい経験を最初に紹介していただいた鹿屋体育大学の学部生時代の先生方、OIS の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。